

滑るように、ヴァムレイは夜空を切り裂くように飛んだ。羽ばたきの音はほとんど聞こえなかった。

眼下に、真つ黒な水晶湖の水面が広がっていた。波立つてはいない。黒い鏡のようだった。前方には、水晶山の威容が黒い影となつてそびえている。頬に吹き付ける夜の風。痛いほど冷たい。

ワドワクスは、しっかりと私の腰に掴まっていた。私の上衣を握る拳は震えていた。いつぼう、私の前のトレアンダ少年は、眼下の水晶湖を見回し、歓声を上げていた。

「わあ、凄いよ！ 呪技遣じゆぎつかいになったみたいだ！」

私はそつと彼の頭の上に手を置いた。

「ヒジューは怒っているんじゃないのかな？」

トレアンダ少年は、はつとした様子で私のほうを振り向いた。

「ヒジューは……ほんとに呪技遣じゆぎつかいだつたんだね」

「真に偉大な人は、己が偉大であることを表には見せないものだよ」

トレアンダは、前方彼方に見える水晶山に顔を向けた。

「姉ちゃんに話したらたまげるだろうなあ。姉ちゃんと一緒に、乗りたかつたな……」

「水晶山からの帰りに、また乗れるよ。今度は、お父さんやお母さんも一緒に」

そう言つたが、口の中に苦みが残つた。

「そうだね、うん。帰りはみんな一緒なんだ！ 一緒に、またレーストで暮らせるんだ！」

私は、何も言わなかった。

半刻もたつたであろうか。私はいつの間にか眠っていたようだった。想像したこともない遙か空の上——しかも伝説の白鷺の背の上で眠れたことが、不思議だった。

「ねえ見て、水晶山があんなに大きく見える！」

トレアンダ少年が前方を指さした。

いつの間にか、眼前の水晶山が、視界を覆うほどに近づいていた。白い雪をかぶつた山頂。わずかに星の光を浴びて、闇夜に浮かび上がっている——山頂にうがたれた

漆黒の穴は、かつて火を噴いていた頃の火口であろう。

水晶山の東側の麓に、かがり火らしき赤い光が明滅していた。ゆつくりと動いている光の点が七つか八つ。人が持つ松明であろうか。さらに水晶山から水晶湖に添うように東へ連なるかがり火の列が見えた。その長さは、おそらく五イコル（約百五十メートル）はあるだろう。麓付近には、建物らしき影も五棟ほど見えた。

「もう着いたんですか？」

始めて背後のワドワクスが声を漏らした。今までずっと、私の上衣にしがみついたまま、うつむいていたらしい。

「ワドワクス、あんたは、水晶山へ行ったことがあるのか？」

「ええ、一昨年に一度だけ。五本角のシロカブトムシが生息しているという噂を聴いて調査に。見つかりませんでした。この地域は地味も悪く、いくつかの廃村がありました」

「東側から水晶山へ向かう道ができ、山麓にはいくつか建物がある。多くの人が集まっているようだ。それに、こんな刻限だというのに、人も歩いてる」

私は眼下の光景を指さした。が、ワドワクスは、そちらを見ようとしなかった。

「顔……上げられないんです。す、すみません。こんな高いところに登ったのは、はじめてで……眼がくらんでしまつて……」

「私だつて、トレアンダだつて、はじめてだよ。いや、この百年のあいだ、この高みから水晶山を見下ろした者は、ヒジー殿の他に、我々だけに違いない」

「ぼくはへっちらだよ。学舎まなびやの先生なのに、臆病なんだね」

トレアンダ少年が笑つた。彼の笑い声を聴くのは、はじめてだった。

「ヴァムレイ、かがり火の東の端へ向かつてくれ」

私が言うと、ヴァムレイは返事をするともなく、進路を南東へ変えた。みるみるうちに、かがり火の連なりが近づいてくる。

「ヴァムレイ、あのががり火の道からはずれた、闇の北側に降りてくれるか？」

やはり、ヴァムレイは返事をしなかった。しかし、私の言葉は充分伝わっていた。

かがり火がまたたく地から、さらに北へ十イコル（約三百メートル）ほどの辺りは、ごつごつとした大小の岩が転がる荒れ地だった。ヴァムレイは、巨岩の一つの上に近づいた。

着地の衝撃は、まったく感じなかった。まるで花に留まる蝶のように、音もなく、白鷺ヴァムレイの両脚は巨岩を掴んだ。静かに翼を閉じる。

真つ先にヴァムレイの背中から降り立ったのはトレアンダだった。小さな体で鞠のように跳ね、器用に岩の上に降りた。私も続いた。いちばん心許なかったのが、ワドワクスだった。足元を確かめながら、おそろおそろ白鷺ヴァムレイの背中から地に降りた。

その様子を見届けると、ヴァムレイは羽ばたきを始めた。羽根の巻き起こす風が、私たちの間を吹き抜けた。

「ヴァムレイよ、感謝する。ヒジー殿にも私たちの感謝を伝えてくれ」

ヴァムレイは喉を鳴らすような声を出した。

そして伝説の白鷺は、現れたときと同様、静かに、そして我々に見送る暇も与えず、

漆黒の空に一気に飛び去って行った。

ワドワクスが、呆然とした顔つきで空を見上げていた。

「まだ……信じられません。あんな……巨大な鳥が存在していたなんて……」

にやりと微笑んで、トレアンダが言った。

「それだけじゃないよ。その背中に乗って、水晶湖を渡ったんだ！」

「あの暖かい羽毛の感触が、まだ残ってる……。ああ、夢を見ているようだ」

「では、そろそろ現実に戻るときだ」

私は言った。胸を衝かれたように、ワドワクスが私を見返した。

「そうですね。水晶山へ行かなければ」

「父ちゃんと母ちゃんと姉ちゃんを、助けるんだ」

トレアンダが、遠くに見える水晶山の影に向かって言った。

私たちは、歩き出した。むき出しの岩が転がる荒れ地はひどく歩きにくかった。ワドワクスはまだ飛行の余韻が残っているらしく、何度もつまずいて転びそうになり、その都度、トレアンダに支えられていた。

やがて、闇の中にかがり火の列が見えた。道のようにだ。幅およそ四十五メートル（約十二メートル）。その両側に、かがり火が規則的に並んでいる。その間隔は、およそ三メートルほど（約十メートル）くらいだろうか。人の姿はない。ただ静寂だけが、その場を覆い尽くしていた。虫の鳴き声すら聞こえない。

私たちは黙ったまま、かがり火が並んだ道に入った。最近作られたものだろうか。

道を削るときに出たとおぼしき土の塊が、かがり火の外側に、何ヶ所か小山となつて
いる。荒地地には、他にも何か焦げたような塊の影が、あちらこちらに怪しげな姿を
さらしている。

私たちが歩き始めてほどなくして、トレアンダ少年が甲高い声を上げた。

「ねえあそこ！ 誰か倒れてる！」

そう言い終えないうちに、少年は走り出していた。私たちも追つた。

道の端に、大人の男がうつ伏せに倒れていることがわかつた。

「おじさん、大丈夫……」

倒れている男に手をかけたトレアンダ少年が凍り付いた。私は少年の肩を掴んで男
の体から離れた。ワドワクスもすぐに察したのだろう。彼は少年をぐいと抱き寄せた。

「あああ……あ、あ、あの顔……」

少年はがたがたと震え出していった。

近づく前に、男がとうに息絶えていることはわかつていた。すでに腐敗が始まつて
いる。かがり火にちらちらと照らされたやせこけた顔。歳は六十に手が届くくらいで
あろうか。屍体となつて面変わりしているので、本当はもつと若かつたのかも知れな
い。画面の中央にうがたれた、空虚な二つの眼窩——その内部で蠢く無数の赤蛆虫。

4

「十日はたつている。この装束から見ても、東の国の人だろう」

私は言った。

「蛇神崇拜者でしょうか？」

ワドワクスは、少年を抱きしめたまま訊いた。

「装束だけではわからないな」

「水晶山へ向かう途中で、力尽きて息絶えた……？」

ワドワクスの問いに、私はかぶりを振つた。私は腐臭に耐えながら、屍体を改めた。

「これは刀傷だ。背中から突かかれている。右肩胛骨の下から刺され、左胸に貫通して
いる」

「つまり……殺された、と？」

屍体の懷に、革袋を見つけた。開くと、数枚の金貨と銅貨が入っている。東方のニ
ムランドウ公国で使われているものだった。追い剥ぎの仕業ではない。

「ゴルカンさん、脚を……」

ワドワクスが屍体に歩み寄ってきた。

「この人の右膝、曲がっていますね。ミリド病かもしれません。人に伝染はしません
が、北東の果ての赤東山地しやくとうとうのミリド銅山から流れ出た悪い水を飲んで流行した病と
言われています。これはかなりひどい。おそらく、歩くのも一苦労だったことでしょう」
「こつちにも、人がいるよつ……！ ああつ、ここにも……！」
いつの間に私たちから離れたのか、かがり火の明るみの外からトレアンダの悲鳴に
近い叫び声が響いてきた。

私とワドワクスは、トレアンダの声がしたほうへ駆け寄った。

トレアンダ少年は闇に覆われた荒地地に立ち尽くし、泣きべそをかいていた。

むき出しの大小の巨岩のあいだのそこここに、焦げた布きれの塊、そして屍体が転
がっているのが暗闇の中、かろうじて見えた。少なくとも両手で数えきれぬ人数では
ない。

ワドワクスが、あえぎながら言った。

「なんてひどい。いったい誰がこんなことを……」

私は、近くの屍体から改め始めた。その着衣によると、屍体は様々な地域から来た
者たちであった。東方人もいれば、南方人もいる。見慣れぬ装束をまとった者もいた。

男も女も若者も老人も大人族コデイークも小人族オゼットもいる。

共通しているのは、みな剣で殺されているということだ。

天幕のあととおぼしき汚れた布が巨岩に引っかかっているのを見つけた。焦げ跡。
焼かれたのであろう。見回すと、他にもあちらこちらに天幕を張られた痕跡が残って
いる。

ワドワクスは、袖で屍臭を必死に押さえながらも、屍体を見て回っていた。

「あちらの女性二人も、ミリド病のようです。そちらの老人は、おそらく白内障そこひで、
ほとんど盲めしいていたでしょう。ひどい、これはひどすぎます……」

ワドワクスも、トレアンダと同様に涙ぐんでいるようだった。

「彼らは寄り添って天幕で暮らしていたんだろう。そこを、何者かが襲った」

「誰がこんな非道な真似を？ 仲間割れでもをしたんでしようか？」

「彼らは、救いを求めて水晶山へ旅してきた人たちだ。水晶山に大蛇が償還されるといふ噂は、世界中に広まっているようだ。体に傷や病を得た人たちが、藁にもすがる思いで、長い旅路の末に水晶山に着いた。そんな彼らが、なぜここで殺し合わなければならぬ？」

「じゃ、やっぱり誰かに殺されたんだ！」

トレアンダの声は憤りに震えていた。

「蛇神崇拝者……いや、その呼び方は正しくない」

「じゃ、誰なんです？」

ワドワクスが身を乗り出す。

「マトスの一派だ」

確信していた。水晶山には、マトスがいる。そして間違はなく、彼に忠誠を誓う狂信者集団がいる——ちょうど四年前のテジンのように。

「マトスたちにとって、体が不自由だったり、病を持っていたりする者は、邪魔で穢けがれた者でしかない。そういう集団だ。やつらに人を救う心など、あろうはずがない」

「許せない！ そんな者が宗教者を騙るなんて、絶対に許せません！」

私がサンナ村のはずれで隠遁している間にも、連中は密かに力を蓄えていたのだ。顔を上げた——水晶山の影。その麓で揺れ動く光の群れ。

歩き始めた。自然に歩が速まった。後からワドワクスとトレアンダが追ってくる足音が聞こえた。振り返らなかつた。

道端のかがり火の間隔が短くなっていった。前方に、ぼんやりと紅い光の塊が見える。ヴァムレイの背中から見えた建物が近づいているようだ。

動いている光点——松明を持った人だ。

私は歩みを止め、道からそれて闇の中の荒れ地へと移動した。

「どこへ行くんです？」

問いかけたワドワクスを、私は手で制した。

私たちは道の外側の荒れ地を進んだ。光の塊が近づいてくる。かなり大きなかがり

火が焚かれているようだった。さらに、建物の影もはつきりと見て取れるようになっていた。

建物まで約七、八十エーム（約二十メートル強）に近づいたところで、私は止まった。岩だらけの地面にかがみ込んだ。二人も私にならった。

粗末なあばら屋のような建物が、道を挟むようにして北側に二棟、南側に一棟建っている。おそらくは急造されたものだろう。北側の二棟を取り囲むようにして、木製の高い柵が張り巡らされていた——その上部は鋭く尖っている。外部から建物に人が入らぬためでなく、内部から逃げ出さないためだ。

松明を掲げた人影が見える範囲に五つ、柵の周囲を歩き来している。

「何でしょう、あれは」

ワドワクスが声を押し殺して言った。トレアンダも、小声で続けた。

「なんだか、やな感じだ。まるで牢屋みたい」

「それは、当たっているかも知れない」

私は剣を抜いた。抜き身——鈍く光る。

「ゴルカンさん……」

ワドワクスが眼を見張った。

「これからは、こいつが必要になる。あんたも、覚悟をしておいてくれ」

ワドワクスがぎょつとした表情になった。そんな彼の前で、トレアンダ少年もまた、彼の体には不釣り合いに長い剣を抜いた。

私はトレアンダの肩に手を置いた。トレアンダ少年は、こわばった笑みを私に向けた。

「駄目ですよ、こんな子どもを巻き込んでしまつては」

ワドワクスが抗弁した。

「もうすでに巻き込まれている。家族を取り返すんだ」

「しかしゴルカンさん……」

さらに続けようとするワドワクスを遮つたのは、当のトレアンダだった。

「ぼくが、行くつて決めたんだ。ゴルカンさんに命令されたわけじゃないよ。ぼくがみんなを助けるんだ。先生こそ、ここで待つて。もし、全員がやつらに捕まっちゃつたら、元も子もないでしょ？ ぼくたちがもしも帰つてこなかったら、先生が代わりに——」

ワドワクスは、やや震えた声で答えた。

「なんて子だ、きみは。先生にも、やらなきゃいけないことがある。先生も、大切な人を助けると自分自身に決めただよ。自分との約束を破ることほど、卑怯なことはない」

「そうだね、先生が嘘ついちゃいけないよ」

トレアンダが緊張を解いた微笑みを見せた。ワドワクスも笑顔を返した。

私は歩き出した。二人は黙ったまま、後についてきた。

かがり火を浴び、私の剣が赤い光を放った。

男が一人、近づいてきた。私たちには気づいていない。私はワドワクスとトレアンダに待つよう合図した。男は東方の装束を身につけ、髪を辮髪にしている。

そつと男の背後に回った。

左手で男の顔を覆った。かがり火の陰へ引きずった。

「マトスはどこだ？」

私は剣を男の喉元に突きつけ、押し殺した声で訊いた。

「き、貴様たち、またしても……？」

男の双眸が恐怖に見開かれていた。

「訊かれたことだけを答えろ。マトスはどこにいる？ 大蛇は水晶山に着いたのか？」

「冥府でヘクロンに舌を抜かれるがいい！」

辮髪の男は齒がみした。

「『またしても』と言ったな。どういう意味だ？ 他にもおまえたちを襲う者が——」

背後に気配——

振り返った。かがり火を反射した刃。二人目の男が、細身の剣を振りかぶっていた。

この男もまた東方人のように見えた。

振り向きざま、相手の剣を薙ぎ払った。火花が散った。次の瞬間、胸を深々と突いた。男はうめいて地面に突っ伏した。向き直る——辮髪の男。すでに抜刀している。突進してきた。やりすぎす。前のめりになった男の腕。剣を振り下ろした。男の手首をかすめた。血しぶきが激しく噴き出した。その血を見て、辮髪の男自身が驚愕の表情を浮かべた。

私は辮髪を掴んだ。ぐい、と引き寄せる。喉元に血に濡れた刃を当てた。

「早く手当しないと、おまえは血を失って悶え苦しみながら死ぬ。答えろ。マトスは

「どこだ？ 大蛇とともにいるのか？」

「聖蛇師様は……」

「聖蛇師様？ マトスはそう呼ばれているのか？」

そのときだった。

「ゴルカンさん！」

トレアンダ少年の悲鳴が聞こえた。振り返ると、かがり火の明滅する下で、五つか六つの人影がもみ合っている。そのうちの一つはトレアンダ、一つはワドワクスに他に違いないだろう。さらに、南側の建物から、数名が飛び出してくる気配があった。おそらく、南側に建っているのは兵舎なのだろう。

彼らに気を取られた隙に、辮髪の男が私に体当たりしてきた。私はもんどり打って倒れた。が、すぐに剣を突き出した。切っ先が男の下腹部を貫いた。私の顔面に生暖かく、生臭い返り血が降りかかってきた。立ち上がり、さらに男の胸を薙いだ。

トレアンダは、自分の体には不釣り合いな長い剣を振りかぶり、人影たちへの威嚇を試みている様子だった。が、人影の一つがたやすくその剣を振り払い、トレアンダの首根つこを掴んで引きずるのが見えた。

顔を拭うこともせず、私は剣を構えて走った。

一人を背後から斬り伏せた。

暗がりの中で、男の悲鳴が聞こえた——ワドワクス。彼は丸腰だ。

駆け出そうとしたときだった。鋭く甲高い音が間近で響き渡った。呼び子だ。ワドワクスとトレアンダを襲った男たちが吹き鳴らした警報の笛に違いない。

地鳴りのような振動を、両足の裏に感じた。かなりの人数の足音だ。少なくとも、両手の指では数えられまい。足音は、南側の建物だけでなく、水晶山のほうから響いてきた。今の呼び子で、討手が差し向けられたのだろう。

わずかに周囲を照らしていたかがり火が、唐突に消された。いつの間にか私の周囲を、数十名の人影が取り囲んでいた。装束はまちまちで、様々な地から集まった者ともうのようなだった。彼らは剣を抜き、今にも飛びかかかると、私を凝視していた。装束

は異なっても、彼らはひじょうに訓練された軍隊であることがわかった。蛇神崇拜者^{ヘクノミ}たちを——マトスを守るために備われた私兵たちだ。

私に選択の余地はないようだった。

「剣を捨てろ」

私兵たちのなかでも、もつとも長身の南方の装束をまとった剣士が前へ出た。寄せ集めの傭い兵たちの隊長格なのであろう。赤と黄の格子柄の長衣がひとときわ目立った。私は剣を鞘に収めた。ゆつくりと地面に剣を置いた。

隊長格の男が眼で合図すると、六人もの私兵が駆け寄り、私を押しえ込んだ。私は抗わなかった。後ろ手で、革の手枷を掛けられた。私の剣は一人の私兵に取り上げられた。

私は六人の雇い兵どもに囲まれた。目的地は、木製の粗末な小屋だった。

12

傭い兵たちに連れ込まれたのは、一辺が四十五メートル（十数メートル）ほどの、ほぼ正方形をした牢獄だった。ざっと見たところ二十名あまりの人影がほとんど隙間なく押し込められている。

入った瞬間、排泄物と汗と腐乱屍体の臭いが入り混じった臭気が私の鼻孔を突いた。傭い兵の一人が私の手枷をはずすと、牢獄内に突き飛ばした。私は収容者の上に覆い被さるように転がった。相手は無反応だった。床には何も敷き詰められておらず、むき出しの土のままだった。

「ゴルカンさん！」

呼び声——振り返ると、人混みをかき分けてワドワクスが歩み寄ってくるのが見えた。泣きそうな顔つきをしている。

「トレアンダは？」

「僕とはべつに、兵士たちに連れて行かれました。あの連中は、子どもを狙ってます」

「怪我はないか？」

「頭を殴られましたが、平気です。コブができただけです」

私は改めて牢獄内を見回した。

囚われている者たちは、誰もが無言だった。私が連れ込まれたことすら気づいていないのかも知れない。みな一様にうつむき、中にはすでに死んでいる者もいるに違いない。

牢は鉄ではなく、木でできていた。粗末な作りだ。体当たりをすれば破れそうに見えた。すぐ外に、槍を持った傭い兵が一人、立っている。

「ゴルカンさんは怪我をしていませんか？」

ワドワクスが小声で訊いた。私は床——地面のわずかな隙間に腰を下ろした。

先日の〈蒼蛇亭〉での立ち回りでの傷が疼いた。見てみると、化膿はしていない。異様な静寂が牢獄内に充満していた。息が詰まりそうだ。

私は、もつとも近くににいる人影ににじり寄った。男は、かなり年老いていた。骨張った両手で膝を抱えてしゃがみこんでいる。ぼろぼろにほころびた上衣は、私が暮らしたサンナ村辺りでもよく着られている装束だった。おそらく西方から来たのだろう。

「あなたも、大蛇の唾液を求めて、ここまで来たんですか？」

私は尋ねた。が、老人は無言だった。

そのとき、奥の暗がりから声が聞こえた。

「無駄だよ。その爺さんは聾だ」

答えたのは、私ときして変わらぬ歳の男だった。男は、地面をゆつくりと這うようにして、いざり寄ってきた。男には片脚がなかった。

「あんたたち、見たところ、二人とも五体満足じゃねえか。なんでまたここへ？」

「あんたも蛇神の御利益を求めてここへ？」

男は声をひそめた。

「いつもより早いで驚いたよ。予定を間違えやがったかと思った……」

「何の話だ？ 私たち以外に、誰かがここに来るのはずだったのか？」

男は、突然ぼつが悪そうな面持ちになった。

「いや、いつももつとやかましいから、何かあったのか、って思っただけさ」

男は、私の問いをはぐらかすようにあらぬ方向を向いていた。

「なぜこんな牢獄がある？ 蛇神は信ずる民すべてを救ってくれるんじゃないのか？」

「そうさ、だから、こうして待ってるんじゃないか」

「待つ？ こんな牢屋の中で？」

ワドワクスが怪訝そうな声を出した。

「しかたねえだろ。じゃあ、他にどうすりゃいいんだ」

男は投げ遣りな言い方になった。男の態度には、どこか違和感を覚えた。

「なぜ、ここに入れられたんですか？」

ワドワクスが問うと、男はかすれた声で笑った。

「見りゃわかるだろ、あんた。この部屋にいる五体満足なやつはあんたらだけだぜ。〈聖蛇師〉様は、俺たちを後回し、つてわけさ。順番が来るまで待つしかねえだろう」
「水晶山へ続く道が作られていた。そこで私たちは見たんだ——数えきれぬ遺体を」
私の後を引き取つて、ワドワクスが言った。

「みな、病者であったり、もつとも蛇神の救いを欲しているはずの人たちでした。そんな人たちが、なぜ殺されなければならないんです？ あなただって、なぜこんな牢屋に閉じ込められるのはおかしいじゃありませんか？ 蛇神の救いなんて嘘つばちだ。救いを求める人を殺す神がどこにいるんです！」

「信じるつきやねえだろ！ 俺はな、この体で南の国のムドーからはるばる来たんだ。今さら帰れるかつてんだ」

男の態度が頑なになった——しかし、私の胸裡に浮かんだ違和感は消えなかった。
「じゃあ訊きます。今まであなたの言う順番が来た人がこの牢屋にいましたか？ 大蛇の唾液をもらつて、病や傷を癒されて故郷へ帰った人が一人でもいましたか？」

「うるせえ！ あんたらに何がわかる？ えっ？ 脚のない人の気持ちがわかるのか？ うるせえ！ 盲いた人の気持ちがわかるのか？ 聾の気持ちがわかるのか？ ガキのときから厄介者扱いされ、役立たずと言われ続けた人の気持ちが、かけらでもわかるつてのか？」

「思いを馳せることは……できません」

「はっ、冗談じゃねえ。いいかい、あんた。俺はご覧の通り、脚がねえ。ガキんとき、蟲車に轢かれたんだ。だから、同じように脚のないやつは気持ちがわかる。けどな、腕のない人の気持ちはわからねえ。盲の気持ちもわからねえ。聾の気持ちもわからねえ。口が裂けても『わかる』なんて言えねえ……」

男の口調は、だんだんと哀しみを増していった。

「……す、すみません……」

ワドワクスが頭を下げた。男は顔を背け、地面に向かって唾を吐いた。

私は話題を変えることにした。

「水晶山の中はどうなっているんだ？ もう大蛇は活動を開始しているんだろうか」

「知らねえよ。ただ、噂だが……連中は、何とかいうガキを探してらつて話だ。大蛇

の言葉を通訳できるガキだそうだ。そいつが見つからない限り、〈蛟漿しゅうじょう〉もお預け

だよ」

「子どもとは〈抛代〉よひしろのことですね。じゃあ、まだ連中は見つけていないことになる……。ジェクは、〈抛代〉になれなかったんでしようか？ トレアンダは？ 彼は、他の牢獄に囚われているんでしようか？ それとも……」

「わからない。とにかく、早く水晶山へ入らなければ」

「はっ、順番はまだまだ先だぜ、お二人さんよ。それにあんたら、〈聖蛇師〉様に刃を向けたんだろ。なら、今夜中にも両腕両脚を切り落とされて火あぶりだぜ」

男がまたかすれた声で笑った。

「他にも捕まったものがあるのか？」

「〈蛟漿〉こじしよを独り占めしようって腹だろ。夕べも二人捕まって、焼き殺された。その前の日は、二人だ。俺なんか、このクソ溜めで、もうひと月も待つてるってのに」再び、男は地面に唾を吐いた。

そのときだった。傭兵が三人現れ、格子の錠前を開けた。その後ろから入ってきたのは、雇い兵の隊長だった。背後に、さらに五名の部下らしき男たちを引き連れている。

「貴様と貴様だ、来い」

五人の兵たちが駆け寄って来た。彼らは、私とワドワクスの体を押さえつけ、牢獄から引きずり出した。

「無罪放免かね？」

私は言ったが、返事はなかった。ワドワクスは、必死に身悶えし、男の蹴りを腹に受ける羽目になっていた。

私たちは、外部へと通ずる廊下を歩かされた。

「私たちと一緒に捕まった小人族オゼットの子どもはどうした？」

やはり、返事はない。

「私たちをどこへ連れて行くつもりだ？」

「貴様に質問は許可されていない」

隊長格の男が、無然とした声で言った。

私たちは牢獄の建物を出て、かがり火の道の真ん中へ連れ出された。そこからさらに、道の西方——水晶山へ向かって連行された。

いつしか、背後の東の空が白々と明けかけていた。

二イコル(約六十メートル)ほども進まないうちに、私たちは止められた。そこは、道幅がやや広くなっており、楕円形の広場になっていた。かがり火の数も多く、周囲よりも明るく照らされていた。道はさらに先へと続き、一直線に水晶山の岸壁に向かって延びていた。水晶山の岸壁には、巨大な岩でできた扉のようなものがぼんやりと見えた——これが、水晶山内部への入り口なのかも知れない。見上げれば、はるか上方に雪を冠した山頂が青白く輝いている。

「ほんとうだったんですね、水晶山の伝説は。この内部に——」

ワドワクスがささやいた。

「黙れ」

私兵の隊長が低い声で言った。

いつの間にか、水晶山へと続く道に三つの影があつた。一人は紫色の長衣を頭から身にまとっている。首に銀色の装飾品を掛けているのが見えた。蛇の姿をかたどっている。その後ろに控える二つの影は、漆黒の鋼の鎧と兜に身を包んだ兵士だった。長い槍を片手に構え、腰には剣を帯びている。寄せ集めの傭い兵たちとは、明らかに違う。

紫色の長衣の男が、ゆつくりと歩み出てきた。

私たちを押さえつけていた傭い兵たちが、手を離した。

私は長衣の男をじっと見つめた。頭部を覆う布のため、男の表情は窺えなかった。誰も、身じろぎ一つしなかった。

私は周りを見回した。傭い兵たちの顔も緊張でこわばっているのが見て取れる。

「——何が、可笑しい？」

長衣の男がはじめて口を開いた。低く響く声。

「どうやら我知らず、私は笑みを浮かべていたらしい。」

「実に可笑しいね。貴様のような輩が、〈聖蛇師〉とやらを名乗っていることが」

長衣の男は無言のまま、首をかしげるような仕草をした。

「大蛇の唾液とやらはもう手に入ったのか、マトス？」

ワドワクスがはつとした顔で私を見つめた。私は続けた。

「まだだろうな。賢き蛇神の使徒たる大蛇が、貴様に何ものをも与えるはずがない。なぜなら、貴様にはその資格がないからだ。たとえ大蛇が甦えようと、貴様は何も得られない。貴様は〈聖蛇師〉を騙る詐欺師、そして邪悪な殺人狂だからだ」

耳が痛いほどの沈黙が落ちた。

私とマトスはしばし、にらみ合った。

「言いたいことは、それだけか……ゴルカン衛士隊長殿」

そう言つてマトスは頭巾を脱いだ。

その下に現れた顔は、四年前とほとんど変わっていない。いや、むしろその当時よりも若返つてさえいるように見えた。

「私はもう衛士隊長じゃない。が、貴様は四年前と変わらず、人喰い鬼にも劣る畜生だ」

マトスは私を一瞥し、片方の眉を上げた。そして、軽く手で合図を送った。

背後から羽交い締めにされた。次の瞬間、後ろ手に手枷をはめられていた。木製の頑丈な手枷だ。ワドワクスもまた、同じ手枷を後ろ手に架けられ、取り押さえられている。

いつの間にか、我々のいる円形の広場を数多くの者たちが取り囲んでいるのに気づいた。

彼らは音もなく、いずこからともなく、周囲からわらわらとフウセンアリのように姿を現した。男も女も、老人もいれば、子どももいた。大蛇の御利益を求めて集まった者たちであろう。その数、百は下らない。人びとは声もなく、円形の広場を取り囲み、私たちを凝視していた——嫌悪と恐怖と好奇と卑屈さの入り交じった表情で。

マトスが、広場を取り巻く者たちへ呼ばわった。

「見るがよい。またここに蛇神へクロンを畏れぬ不敬の者が現れた。懲りることを知らぬ愚者を、〈大くちなわ様〉に近づけることはならぬ。心ならずも、また今宵、愚者を滅する儀を行なわねばならぬ！」

私とワドワクスは、六人の私兵によつて囲まれ、広場の中央に引きずり出された。

「ゴルカンさん……」

ワドワクスが不安げにささやいた。私は黙つたままだった。

傭い兵の隊長が、剣を抜いて私の前に歩み寄り、合図をした。まず、ワドワクスが引きずり出された。

我々を取り囲む者たちのあいだから、地響きのような、うなり声が響き始めた。何と言っているのか聞き取れなかった。が、それが呪われた言葉であろうことは推測できた。

ワドワクスが、広場の中央に引き倒された。彼は無様にうつ伏せに倒れ込んだ。顔を上げる。私に救いを求めるような表情だった。しかし、私にできることは何もなかった。

次の瞬間——ワドワクスの目つきが変わった。

彼は大声を張り上げた。

「眼を覚ませ！ 病を得た者を、傷ついた者を、無惨に殺す神があるだろうか？ み

んな知っているだろう？ 病者たちが無惨に殺され、その屍かばねが累々と横たわっていることを。牢獄に閉じこめられ、殺されるのを待つ人々がいることを。それでいいの

か？ あんたたちにも家族はいるだろう。愛する人はいるだろう。そんな人々を捨て、苦しめてまで、『不老不死』が欲しいのか？ 僕は今、この場で殺されるだろう。し

かし、あんたたちの耳には、僕の最期の声を刻みつけてやる！ あんたたちの眼には、僕が殺される場面を、とことわに焼き付けてやる！ 万が一こうしよう〈蚊漿〉を得ても、そ

の後の永遠の生は、冥府で業火に焼かれるよりも苦しく恐ろしいものになるだろう！

得るものより失ったものの重さに、心を八つ裂きにされるだろう！ それは、報いだ。それを覚悟の上、今から起こることをしつかりと見るんだ！」

次の瞬間、兵士の一人が槍の柄尻でワドワクスの鳩尾を付いた。ワドワクスは「がっ」とうめいて地面にうずくまった。

そのワドワクスに向かつて、傭い兵の隊長が剣を振り上げた。

ワドワクスが私を見上げた。彼は静かな笑みを浮かべていた。

「ちよっと、格好つけ過ぎましたね。僕らしくない」

ワドワクスは自嘲するように言い、覚悟するかのように眼を閉じた。

もはや、誰も、しわぶき一つ立てなかった。

次の刹那だった。腹に底に響く音。曙の空気を切り裂いた——重く低い角笛の響き。

その場にいる誰もが体を硬直させた。

南の方角から騒がしい物音が耳に届いた。多くの足音だろうか。続いて、金属的な

音。傭い兵たちが、顔を見合わせた。徐々にこちらに近づいている——劍戟の音。出し抜けに私たちの眼に、彼らの姿が飛び込んできた。

純白の長衣をまとい、同じく純白のカケトカゲにまたがった十人ほどの劍士の姿だった。異様なのは、そのいずれもが白い仮面を着けていることだ。ほぼ逆三角形のその仮面は、両眼の部分に細い切れ込みが切り開かれている。口の部分からは、紅く塗られた舌が飛び出した意匠が施されている——白蛇の面。一見、拙い彫刻だが、年季が入っている。

白蛇面の集団は、傭い兵たちを剣で薙ぎ払い、突進してきた。手練れている。広場を取り囲んでいた人びとは、蜂の子を散らすように逃げ始めていた。

「マトス！」

私は怒鳴った。しかしマトスとその護衛の兵士たちは、すでに水晶山へ退き始めていた。

白蛇面の一人が純白の長衣を翻し、カケトカゲから降り立った。と同時に、腰から剣を抜く——滑らかな動き。兵士は素早く私の背後に回った。

私の背中を、一筋の汗がしたたり落ちた。覚悟をした。

次の瞬間、私の手枷が両断され、いましめが解かれた。

ワドワクスのそばにも一人の白蛇面が近寄り、手枷を外していた。

白蛇面の劍士は、私の前に戻り、低い声で言った。

「怪我はない？」

女の声だった。

答える間はなかった。次の瞬間、女劍士の背後に殺気を感じた。

マトスの傭い兵——剣を上段に振りかぶって突っ込んでくる。隙だらけの構え。

反射的に白蛇面の女から剣をもぎ取った。女を突き飛ばしす。剣を下段から一気に斬り上げた。傭い兵は胸から激しく鮮血を噴き出し、一瞬後に地面にくずおれた。

「ゴルカンさん！ 無事ですか？」

ワドワクスが駆け寄ってきた。

「大丈夫だ——」

言いかけたとき、もう一つの殺気。巨漢だった——ワドワクスの背後。私より頭三分は背丈が高い。見たことのないほど巨大な戦斧を上段に構えている。ワドワクスの前に、白蛇の面の女が立ちはだかった——丸腰のはずだ。彼女の剣は私が持っている

る。

巨漢の傭い兵が戦斧を振るった。面の女は、ワドワクスを突き飛ばし、一撃はかわした。が、巨漢の第二撃。女が吹っ飛ばされた。面が真っ二つに割れた。地面に転がった。女はうつ伏せに倒れた。頭巾の隙間から、栗色の長い髪が流れるようにこぼれ出た。

巨漢が下品な笑みを浮かべつつ女に近づいた。ワドワクスが素手のまま、巨漢の背中に飛びついた。背後から、指で巨漢の両眼を突く——巨漢が両手で顔を押しさえ、獣のような咆哮を上げた。

私は剣を振り下ろした。巨漢の両腕が戦斧を握ったまま地面に落ちた。巨漢の狼狽した顔。ほとぼしる血潮。私は巨漢の胸を突いた。巨体が倒れ込んだ。地響きのような音。

麓近くの建物のほうから、煙が上がっているのが見えた。どこかで火が放たれたのだ。

「ええい、退け！ 退くのだ！」

私兵の声が聞こえた。が、すでに戦意を喪失し、混乱している傭い兵たちは、その声よりも前に、水晶山へ向かって遁走を始めていた。

面を着けていた女が、よろめきながら立ち上がろうとしていた。

私は彼女に手をさしのべた。が、彼女は私の手を振り払った。その顔を上げた。

栗色の髪は、わずかに波打って腰の辺りまで垂れている。そして髪とほぼ同じ色の瞳。細い眉。ややとがった顎。額には、戦斧の一撃で付けられたらしい傷。血がにじんでいる。

女、私、ワドワクス三人のあいだで、ときが止まった。

最初に動いたのは、彼女だった。彼女は私から剣をもぎ取った。一振りして血脂を払うと、すばやく鞆に収めた。

「すまん……」

ようやく口を衝いて出てきたのは、その一言だった。彼女からの返答はなかった。「きみの剣を汚してしまった」

私は、ドウイータに向かって言った——四年前には十六歳の少女だった剣士へ。

ドウイータはうつむいたままだった。私のほうへ視線を向けようとはしなかった。

「ドウイータ……！」

ようやくワドワクスが口を開いた。が、それ以上の言葉が出てこなかった。ドウィータがワドワクスを見つめた。

「ワドワクス……どうしてこんなところに……？」

ドウィータが、あえぐようにして言った。

少女は、大人の女になっていた。しかし、変わらぬ声だった——四年前と。

「決まっているだろう。きみを探しに来たんだ。やつと……やつと会えた……」

ワドワクスが感極まった声で言った。

「ワドワクス……あなたは、なんて人……。こんな恐ろしい場所まで……」

「きみのためだ。当然じゃないか」

「ワドワクス……！」

二人がほぼ同時に駆け寄った。そして、二人はしっかりと力強く抱擁を交わした。私は二人に背を向けた。

煙の上がる兵舎のほうを見やった。火災は激しくなっているらしい。明け方の空に向かつて、ちらちらと火の粉が舞い上がっていた。

カケトカゲに乗った白蛇面の剣士が、手綱を巧みにさばいて私のほうへ近づいてきた。た。

「乗りたまえ、お若いの」

年老いた声だった。が、有無を言わさぬ威厳が、その声には込められていた。

私はあぶみ鐙を使わずに純白のカケトカゲに跳び乗り、男の後ろにまたがった。

「わしはフソリテス。そなた、北方の御仁とお見受けするが」

「私はゴルカンと申します。ご推察の通り、北方の生まれですが、西の国から来ました」

「そなた、いったい何用あって、水晶山へ？」

「話せば長くなります」

ふと見ると、ワドワクスとドウィータもまた、一頭のカケトカゲに乗るところだった。た。

「塔へ戻るぞ！」

フソリテスが怒鳴った。

私たちを乗せたカケトカゲを先頭に、白蛇面の一団も兵舎のほうへ駆け出した。

ほどなくして、兵舎が焼け落ちてゆく様子が見えた。数十名の傭い兵たちが恐慌を来たし、散り散りになってあらぬ方向へ駆け回っている。

牢獄は解放されていた。一人の男が、松明を掲げた白蛇面たちに大声で指示をしている。細長い毛布の包みを大事そうに抱えていた。収容者たちはすでに解き放たれ、牢獄はほぼ空のようだった。

男はこちららに気づいて振り返った。

「首尾は？」

「駄目だ。またしても彼奴は逃げおつた」

私の前の男——フソリテスが言った。

「こちらは、ほとんどみな避難が済んでいます。とりあえず、歩ける者を先導させて、

いおす五百洲川沿いに塔へ逃げるよう指示しました」

男は、牢獄にいた片脚の男だった——しかし、今は二本の脚で立っている。

「逆らう者はいなかったか？」

「いえ、あんな仕打ちをされたら、誰も〈こうしやう蛟漿〉なんぞ、信じなくなりますよ」

男も、私とワドワクスに気づいた様子だった。

「おっと、あなたたちも無事だったんですね」

その口調が、がらりと変わっていた。

「片脚はどうした？ 傭い兵どもから一本取り上げたか？」

私は尋ねた。

「そいつは面白い。ずっと縛ったままだったから、まだ痺れますよ」

男はにやりと笑って見せ、長い包みを抱えたまま、近くの白蛇面の乗るカケトカゲの鞍に慣れた様子で跳び乗った。

出し抜けに、轟音が響き渡った。眼前で、兵舎が崩れ落ちた。火の粉が明け方の空高く舞い散った。残ったわずかな兵たちは、白蛇面の集団に対抗することもせず、這々の体で水晶山のほうへ向かって逃げ出していた。さらに、牢獄からも炎が上がっていた。

フソリテスと呼ばれた男が叫んだ。

「勝利したと思うな！ 闘いは、これからだ！」

彼は手綱をさばくと、純白のカケトカゲに拍車を掛けた。

他の者たちも続いた——ドウィータとワドワクスを乗せたカケトカゲも。

白蛇面の一団は、南に向かって走り出した。

13

カケトカゲの一団は、全力で道なき道を駆け続けた。先頭は、フソリテスと私の乗る純白のカケトカゲだった。白蛇面たちは大勢いるように思えたが、実際には、わずか十数名だけだった。ただそれだけの一団で、数にはるかに勝るマトスの傭い兵たちを打ち負かし、兵舎と牢獄を破壊し、囚われ人たちを救出したことになる。

剣の訓練はなされている。が、彼らは軍や衛士隊に見えなかった。兵や衛士ならば、多かれ少なかれ死の匂いを放っている。死を見ることにも、死を与えることにも、死を受けられることにも、慣れていない。そう訓練されている。酷薄な死の匂いを身にまとっているのだ。

かつての私もそうだったはずだ——そして今また、再び死の空気を運ぶようになっていた。

今日だけで、いくつの命を奪ったことか——思い出したくはないが、彼らの断末魔の瞬間の顔は、一人一人すべて、私の脳裏にべつたりと張り付いている。この先、私自身が死ぬ時まで、彼ら一人一人の表情は、私の記憶から離れることはない。

私は私を呪い、私を呪う死びとたちを呪った。

しかし、私を取り囲むこの白蛇面の集団には、そんな暗い影がなかった。牢獄で会った男のように、無垢な心持ちすら感じさせた。

そしてそんな彼らのなかに、ドウィータがいる。

ごろごろとした大小の岩が転がる荒野が、いつまでも続くように思われた。しかし、純白のカケトカゲは、そのような地面を走るための訓練を受けているようだった。

その間、フソリテスは、一言も口を利こうとしなかった。私もまた、無言のまま鞍に座り続けた。視界の片隅に、ドウィータとワドワクスの乗るカケトカゲが見えていた。

私は、フソリテスの肩越しに前方へ眼を向けた——広がる荒野。乾き切り、むき出しの岩が転がり、ところどころに草が生えているだけの土地——。

二刻ほど駆けた頃だろうか、前方に高い塔が姿を現した。一角犬の角のようだ、と

私は咄嗟に思った。その塔は、まっすぐに円錐形に天空に向かってそびえ建っていた。その高さは三イコル（約九十メートル）以上はあるかも知れない。日の光を浴びて、塔の純白の外壁が光っている。大理石で出来ているのだろうか。

塔の周囲に、いくつもの天幕が張られていた。さらにそれら天幕の外周は、簡素な木製の柵で囲まれている。塔を中心として、一つの集落を形成しているようだ。

我々が近づくと、天幕の下から数名の女たちが駆け寄ってきた。

白蛇面の集団は、柵の内側で純白のカケトカゲを止めた。私も、ようやく鞍から降りることができた。私たちが降りると、カケトカゲは命じられもしないのに、他のトカゲたちと一緒に、木でできた囲いの中へ入って行った。

オゼット
小人族の女の一人が駆け寄ってきた。小人族はだいたい、傍目には大人族より若く見えるが、彼女はそれでも四十は過ぎていようだった。

「フソリテス様、ご首尾は？」
女の問いに、フソリテスは白蛇の仮面をはずした。

その下から現れたのは、日に焼けた浅黒い肌をして、真つ黒な顎髭をたくわえた老人だった。歳のころは、五十前後であろうか。その顔には深い皺が無数に刻まれていた。

「囚われ人たちを解き放つことができた。現在、五百洲川いおす沿いに、こちらに向かっておるところだ。薬や寝台の用意を。病を持つたり怪我を負うた者がほとんどなのだ。フドーニ、そなたには迷惑を掛けるな」

「いいえ、フソリテス様、あたしたちはフソリテス様に救われた身です。迷惑なんて……もつたないお言葉です」

「天幕も新たに張らねばならんだろう。これからが大ごとだ。ファイエルたちと協力して、早急に用意してくれるか？」

「はい、わかりました」

女は天幕のほうへ駆け戻った。

それと入れ違いに、牢獄で一緒だった片脚の男——今では両脚を持っているが——が駆け寄って来た。

男はにやにやしなから、私に言った。

「俺の名前、まだ教えてませんでしたね。ムーレグ。あなた、ゴルカンっていうんですね。ワドワクスから聞きましたよ」

「そつちは早々と意気投合したようだな」

「いやあ、驚きましたね。ワドワクスが、あのドウィータさんの婚約者だったなんて」
私は黙っていた。そこへ、フソリテスが割り込んできた。

「ムーレグ、無駄話はいい加減にして、フドーニたちが天幕を張るのを手伝ってやらんか。男手が必要なはずだ」

「わかりました。じゃ、またあとで、ゴルカン」

馴れ馴れしい笑みを浮かべ、ムーレグは天幕のほうへ駆けて行った。

フソリテスは、険しい表情を私とワドワクスに向けた。

「ムーレグとはすでに知り合っていたようだな」

「ええ、牢獄で一緒でした。まさか、あなたの部下だったとは」

ワドワクスが苦笑した。

「部下ではない。わしの息子の一人だ」

「息子？」

「わしの命で、わざと牢獄に囚われ、連中の情報を得ていた。すなわち、密偵だ」

「なんとね……。今、『二人』とおっしゃいましたが、他にも息子さんが？」

「うむ、ムーレグには兄がおる」

「その彼も、密偵として送り込んだんですか？」

フソリテスは答えなかった。その代わりに、彼は逆に問いを返してきた。

「そなたたち、いったいいかなる了見で騒ぎを起こした？」

「私たちは何もしていません。有無を言わず蛇神崇拝者^{ヘクロナミ}たちに捕まったのです」

「蛇神崇拝者……その名を軽々しく呼んでいただけたくない。あの連中は蛇神崇拝者などではない。マトスに金で買われた傭い兵たちと、偽りの言葉に惑わされた愚かしく哀しい者どもに過ぎぬ。それより、ゴルカンと言ったな、見たところ大きな怪我もないようだ。カケトカゲを一頭、与えよう。そなたの故郷に帰るがよい」

「ありがたい、と言いたいところですが、まだ私にはやることが残っています」

「マトスに何か遺恨があるようだな。マトスは我々が征伐する。そなたたちの手を煩

わずに及ばん。いや、正直に言おう。勝手に動かれては、こちらが迷惑なのだ」

「遺恨……確かに、そうかもしれない。しかし、それだけじゃありません。私たちが巻き込んでしまった子どもが、行方知れずなのです。トレアンダという小人族の少年です。マトスたちが、彼を〈抛代〉よわしろにしようと企んでいる可能性があります」

フソリテスの顔が険しくなった。

「それにもう一人、行方知れずの少年を探しています」

フソリテスの眉がぴくりと動いた。

「ジエク、とかいう子のことかね」

「ご存じでしたか」

「ドウィータがここへ現れたのも、その子を探すためだったな。その彼女を追って、そなたたちもまたここへ導かれた、というわけか——因果とは不思議なもの」

私は、思い切つて問いを口にした。

「あなたたちこそが……ほんとうの蛇神崇拜者なのですね」
ヘクロナミ

フソリテスは、片方の眉を上げ、私の顔を静かに見つめ返した。

「左様だ、お若いの」

「あなたたちのお考えがわかりません。マトスを倒してどうするおつもりなんです

か？ やつの後釜に座つて、大蛇から〈蛟漿〉こうしょうを奪おうと？」

私が言うや否や、フソリテスはしわがれた声で笑い出した。

「蛟漿」？ そんなものはありません。偽りの〈聖蛇師〉たわじとが作った戯言だ」

「しかし、大蛇は七つの心の臓を手に入れ、眠りから覚めてしまった。北の国、ブレジクにあった祠から飛び立ち、そして今、水晶山にいる」

「ほう、そんなことまでご存じか？ 〈大くちなわ様〉は利用されているに過ぎぬ。

畏怖すべきお方ではあるが、この地上を危機に貶め得る存在にもなりかねん」

「では、あなたたちの真の目的は？」

「聖蛇師」が二人あつてはならん。偽りの〈聖蛇師〉は、成敗されねばならん」

「と……と……」

「いかにも、このわしが、真の〈聖蛇師〉を受け継ぐ者。〈黎明の闘い〉以来、その血を継いできたフソリテス家の末裔。我々の——いや、わしの目的は、ただ一つ。見守ること。それが、代々の〈聖蛇師〉に伝えられし、務め」

「ただ、見守ることだけが？」

「この地上界が、真に〈大くちなわ様〉を必要とするときまで、その眠りを見守ること。今はまだそのときではない。〈大くちなわ様〉には眠り続けていただかねばならぬ」

「しかし、大蛇は……眼を覚ましてしまった」

「そうだ。不思議でならんだ。四年前にも起こり得なかったことが、なぜ今、起こってしまったのか……？ マトスにそのような力があるはずがないのに」

「四年前のテジンの事件をご存じなんですね？ あの事件のとき、私はテジンの衛士隊長でした。そして、マトスたちを追っていたのです」

「四年前……」

フソリテスの顔が苦渋にゆがんだ。

「後悔しても、しきれぬ。あのとき、もっと早くわしがマトスの野望に気づいておれば……あんな惨劇は避けられたかもしれぬ。少女たちの命は助かったかもしれぬ。今の危機もまた、回避できたはずなのだ」

「四年前から、あなたもマトスを知っていたんですか？」

「そのずっと昔からだ。あの男がこの世に生を受けたときから」

「すると……」

私は言葉を失った。

「マトスは……わしの弟だ」

そう言うと、フソリテスは白い塔に向かって歩き出した。私もその後続いた。

「〈聖蛇師〉の地位は、代々その長子が継ぐ。先代の〈聖蛇師〉は、わしの母だった。あの塔は〈黎明の戦い〉の頃に建てられたものだ。ほぼこの地上の中央に位置している。十二賢者たちによって〈大くちなわ様〉たちが北の果てのレグドランに追放された後、地上界を見守るために建てられた。が、二千年のあいだ、誰にも顧みられることもなく、我が一族のみがひっそりと塔のなかで暮らしていた。『地上界を見守る』という務めもまた、形だけのものに成り下がっていた、と言えよう。信者たちのわずかな寄進を糧に、我が一族は細々と長らえてきた。そもそも、我々自身が〈大くちな

わ様〉の眠る祠の存在を知らされていなかった——この二千年のあいだ」

「しかし、マトスはすでに四年前に見つけてしまったのです」

塔の入り口は、まったく何の装飾もほどこされていらない、平らな木製の扉だった。フソリテスが片手をかざすと、その扉は開いた。

塔内は、天井の高い聖堂に似た空間だった。飾りのない正方形の窓がうがたれ、そこから明るい外光が差し込んでいる。ひんやりとした空気が充滿していた。右手から上階へ続く螺旋階段が伸びていた。何もかもが無機的だった。

フソリテスは続けた。

「わたしとマトスは、決して親密な兄弟だったわけではなかった。十六も歳が離れていることもあろうが、わたしは〈聖蛇師〉を継ぐための勤めに若い時期の大半を費やして、幼い弟とあまり遊んだという記憶がない。おそらく、ほとんど会話らしき会話もなかったであろう。父は、母がマトスを生む少し前に亡くなったが、わたしはほとんど一日中、母から〈聖蛇師〉継承のための教えを受けていた。それが日常だった。わたしはそれに一片の疑問も抱くことはなかった。だが、マトスはそう思いはしなかったようだ。マトスは、彼が十三歳のとき、この塔を飛び出した。わたしも母も……彼を探そうとはしなかった」

フソリテスは、螺旋階段へ歩を向けた。私も続いた。

「どうして?」

私が問うたが、答えはなかった。ただ黙々と階段を上がり続けている。

「なぜ、マトスを探し出そうとしなかったのです?」

「そうすべき理由がなかったからだ」

「おっしゃる意味がよくわかりませんが」

「〈聖蛇師〉の家にとつて、マトスという男は必要ではなかった、という意味だ」

「それは……残酷なお答えですね」

私は言った。フソリテスは、それ以上、何も言おうとしなかった。ただ黙ったまま、

螺旋階段を上がり続けた。

どれほど上がっただろう。私は息切れし始めていたが、フソリテスにはそんな気配は微塵も感じられなかった。おそらくは、二十階分は登ったはずだ。

最上階とおぼしき、螺旋階段の先には一枚の扉があった。やはりほとんど装飾のない、質素で平らな木製の扉だった。

扉には、大きなかんぬきと錠前が取り付けられていた。フソリテスは上衣の下から大きな銀色の鍵を取り出した。錠前は難なく開かれた。

フソリテスは、扉を押し開けた。

外光が流れ込んできた。まぶしさに、少し涙が出た。

塔の屋上だった。純白の大理石が、隙間なく敷き詰められている。鏡のように滑らかだ。眼前に、水晶山の威容が見える。その山頂付近は、灰色の雲で覆われて隠されていた。

「わしはこの四年間、何をやってきたのであろう、と時折自問することがある。ただ塔に閉じこもり、書に埋もれ、ただこの地上界の平安を祈り続けてきただけだ」

いつのまにかフソリテスが私の脇に立ち、私とともに水晶山を眺めていた。

「四年前にマトスを逃したのは、我々テジンの衛士隊の失敗でもあります。あの事件のすぐあと、私は衛士を辞めました」

「ほう、なぜだね？」

「おそらく……逃げたかったのでしょう。いろいろなものから。あのとき、私はあまりにも多くの過ちを犯し過ぎた。助かるはずの命をいくつも亡くしてしまった。死ぬべきでない者が死に、傷つくべきでない者が傷つき……私は生き残ってしまった」

「後悔しておるのか、今、生きておることを？」

「後悔と呼ぶべきなのかどうか、わかりません。とにかく、何も確かなことがわからないのです。いや、わかりなくなかった、と言ったほうがいい。形ある確かな答えを得ることから、逃げたかった。そういうことです。だから衛士を辞め、西の国の小さな村はずれで隠れるように生きてきました——この四年間」

「そして今、そなたは、この塔の上でわしと並んでマトスの隠れている水晶山を眺めている。それを、どう思うね？」

「わかりません。不思議な縁えにしだとは思いますが。こんな闘いに参加するはずではなかった。あのマトスと、再び剣を交えることになろうとは……皮肉な偶然です」

「偶然など、ない。森羅万象、すべては必然。そなたが今、ここにいるのは、ここにいなければならないからだ」

「運命、という意味ですか」

「何と呼ぼうが、勝手だ。人は、何かを残したまま生き続けることはできぬ。『何か』」

とは、人かもしれぬ。物かもしれぬ。思いかもしれぬ。何か残して生きる者は、必ず二種類に分かれる。『何か』を完全に捨て去る者。あるいは、もう一度『何か』と邂逅し、対峙し、自ら決着をつける者。この世とは不思議なものでな、後者には、必ずそのときが巡って来るものだ。それが天上界の神々の思し召しなのか、邪な冥王の悪戯なのか、わからぬが」

「今が私にとっての『そのとき』だと?」

「さあ、答えを出すのは、そなた自身だ」

「はぐらかされたような気がします」

フソリテスは皺だらけの顔で微笑んだ。しかし、すぐに真顔に戻った。

「しかし、わしにとっては、今が『そのとき』だ。今を逃せば、マトスと、そして〈大くちなわ様〉と相見える機会は二度と巡っては来ぬ」

短い間だけだったが、静寂が屋上に満ちた。吹き抜ける風すらも弱まっていた。水晶山の山頂は、相変わらず、暗い。

「マトスは、まだ大蛇のほんとうの力を利用できずにいるようです。〈よりしろ抛代〉が見つかっていないんでしょう」

「仮に〈抛代〉たる子どもを見つけ出したとしても、あの〈大くちなわ様〉の真の名を呼ぶことができなければ、〈大くちなわ様〉は〈聖蛇師〉に従うことはない」

「真の名?」

私は尋ねた。

「ゴルカン、〈大くちなわ様〉は何匹いらしたかご存じか?」

「いいえ」

「七十七匹だ。十二賢者たちは、彼らのうち七十六匹は北方の『悪魔の地』レグドランに追放したが、一匹だけは残された。それが、あの大蛇だ」

「なぜ、一匹だけ残されたのですか? 二千年前に十二賢者たちが、すべての大蛇をレグドランへ追いやっていたら、こんなことにはならなかった」

「彼女が……もつとも幼かったからだ」

「彼女? つまり、あの蛇は、雌——女性なのですか?」

「左様。十二賢者は、言わばヘクロン神と取引をしたのだ」

「取引? というと?」

「大くちなわ様」が二度と再びこの世界に姿を見せぬよう、一匹だけをこの地にとどめ、眠っていただくことになった」

「つまり、あの大蛇は……人質なんですね。もしも再び七十六匹の大蛇たちがこの地で叛乱を起こす企てがあつたとしても……我々人には、あの大蛇がいる」

「彼女は、生みの親から引き離され、呪技によつて長き眠りに就くことになった。蒼い御影石の祠のなかで、たった一人……」

次の瞬間、我々が入ってきた木製の扉が乱暴に開かれた。

現れたのは、ムーレグだった。激しく息を切らせている。彼は、長い汚れた毛布の包みを大事そうに抱えていた。

「ああ、心の臓が破れそうだ。ずいぶんと探しましたよ」

「何用だ？ 天幕の準備はできたのか？」

「いえ、まだですが、これをゴルカンに、と思つて」

ムーレグは汚い毛布の包みを私に突き出した。

受け取つた。毛布を開いた私は、息を呑んだ。

私の剣だった。水晶山の傭い兵たちに没収され、兵舎とともに燃え尽きてしまつたとばかり思つていた。

私は鞘から剣を抜きはなつた。銀色の刃。傷一つついていない。傭い兵たちは、私の剣を私の体ほどには乱暴に扱わなかつたらしい。

「ありがとう、ムーレグ、礼を言う」

「年季が入っているが、刃こぼれ一つない。じつと見てみると、吸い込まれそうな気分になります。よほどの巧が鍛えた剣なのでしょう」

「私はこの剣を父からもらつた。父は——刀鍛冶だった。テジンでも腕のいいほうだつたらしい。しかし、多額の借金を残して、私が子どもの頃に亡くなつたがね。ある夜、金貸しどもが大勢、家に現れて引っかけ回し、ありとあらゆるものを持ち去つて行つた。そんななか、この一振りの剣だけが残された。屋根裏に隠されていたんだ……」

ミドリネズミの駆け回る屋根裏で膝を抱え、必死に泣き声を押し殺していたときの気持ちをも、いつまでたつても忘れることはできない。

私は剣を鞘に収めた。

「こりゃあ、ずいぶんと血を吸つた剣のようですね」

「わかるかね。さすが〈聖蛇師〉の息子だ。しかし、なぜこれが私の剣だと？」

「北の学舎まなびやの先生がそう言うので」

ムーレグはそう答えて、今し方出てきた扉のほうへ顔を向けた。

「ワドワクスが？」

私もそちらに眼を向けた。

ワドワクスではなかった。

真っ白な長衣が、風になびいている。長い栗色の髪もまた。そして、その髪と同じ色の瞳は、はるか水晶山へと向けられたままだった。

「じゃ、私はこれで。もうすぐ怪我を負った囚われ人たちが着きます。その前に天幕の準備をしなくては」

ムーレグは父親に軽く礼をすると、そそくさと立ち去った。扉が閉じられた。その間に、彼女は黙ったまま立ち尽くしていた。

フソリテスは、しばし私たちを見やると、ゆつくりと扉に向けて歩き出した。

「言葉は時として非力だ。有害なときすらある。しかし、不要なものではない。そなたたちには今、言葉が必要なはずだ」

フソリテスはそう言い残すと、屋上から去った。

私とドウィータだけが、そこには残された。

いったい、どんな言葉が必要だというのか。

私はゆつくりと扉に向かって——ドウィータのほうへ、歩み寄った。

私はドウィータの前で立ち止まった。彼女は、身動き一つしなかった。

「きみには礼を言わなければ」

「何がですか？」

彼女は他人行儀だった。相変わらず、瞳は彼方の水晶山に向けられたままだ。

「二つある。きみが気づいてくれなければ、この剣は私の許へ戻っては来なかった」

「もう一つは？」

「水晶山の麓で、命を救ってくれたことだ」

「あなただと知って救ったわけじゃありません」

「私だと知っていたら、見殺しにした？」

彼女は、鋭い目線を私に向けた——四年ぶりに、彼女の顔を正面から見た。

変わっていない——もう二十歳になっているはずだが、私の眼には、泣きながら私の胸に拳をぶつけてきた少女そのものにしか見えなかった。

——ゴルカンの馬鹿！ お兄ちゃんを返して！

「わたしがそんなに愚かしい者に見えますか？」

「いいや、見えない。すまない。失言だった。きみは、昔も今も、誰よりも深く思慮し、そして誰よりも早く行動する人だ」

「あなたに……今のわたしの何がわかるんです？」

冷やかな声だった。

「ウドワクスと一緒に、テジンからずつとここまでやってきた。きみの足取りを追うように——きみは、いつも私の遙か前を進んでいた」

「何が言いたいのかわかりません。四年前にわたしをテジンに置き去りにして逃げ出し、今更……こんな場所にこんなときに現れて……理解に苦しみます」

「そう……私は、きみと会うべきじゃなかった」

「じゃあ、なぜここにいるの？」

彼女は、責める口調になっていた——十六歳の少女のように。

「きみと同じ理由だ。ジエクを探しに来た。それに、旅の途中で巻き込んでしまったトレアンダという少年もまた、連中に捕まったらしい。二人を、なんとしても救い出さなければならぬ。今度ばかりは……失敗はできない」

「それで——」

言いかけたドウィータが口をつぐんだ。私は、彼女が再び口を開くのを待った。

やがて、彼女は静かにつぶやくように言った。

「それで……償いになるとでも思ってるの？」

償い。赤褐色のゾイラ苔。横たわる屍体。見開かれた両眼——フラツカル。

——ゴルカンが……代わりに死んじやえばよかつたんだ！

耳の奥で頭蓋に響く少女の叫び。

「何？」

ドウィータが驚愕の表情を見せた。私は無意識のうちに口に出していたらしい。

「私が何をして、四年前の償いなど決してなりはしない。しかし、今ここでやめるわけにいかない。誰の命令でもない」

ドウィータはうつむいていた。その表情までは窺い知ることができなかった。

「きみには悪いが、私はここを去るつもりはない。しばらく、きみと顔を合わせて不快な思いをさせることになると思うが、許してもらいたい」

相変わらず、ドウィータは無言だった。

「風が出てきた。私は下に降りるよ。怪我人が大勢来るんだろう。手伝ってくる」

私は扉を押し開いた。塔のなかは先程よりも暗く感じられた。ドウィータはついて来なかった。

私は足早に螺旋階段を駆け下りた。

「蛇神覚醒」第六話へつづく